「価　値　価　格」と　価　値*

Studies in the "Value Price" and Value

勝　田　政　広[1)]
Masahiro KATSUDA

目　　次

Ⅰ．序
Ⅱ．商品の二面的性格
　① 物と商品
　② 商品交換について
　③ 商品の二面的性格
　④ 労働の私的性格と社会的性格
Ⅲ．価値形態の展開
　① 単純な価値形態
　② 全体的な，または展開された価値形態
　③ 一般的価値形態
　④ 貨幣形態
Ⅳ．結

Ⅰ．序

生産価格とは文字通り価格であり，生産価格は価格としての資格を得るやいなや，市場調整価格としての機能をはたす。いうまでもないことであるが，生産価格は，費用価格と競争の介在により生み出されるところの平均利潤との和で示される。したがって，生産価格論段階においては，生産価格の構成要因はすべて価値の変容あるいは転形を受けた物としてとりあつかわれるのである。ここに至って Marx の生産価格論における2つの総計一致命題，すなわち総生産価格＝総商品価値・総利潤＝総剰余価値，にたいして，その命題の成立，不成立とならんで1つの問題が提起される。すなわち，生産価格と価値のディメンジョンはことなるから比較することができないのではないかと[2)]。

さてその指摘はさておき，生産価格と商品価値との背離に目を向けてみよう。それは資本論第Ⅲ巻第2篇第9章において述べられている。しかしこの価値と価格の背離の可能性は，恐慌の可能性が資本論第Ⅰ巻第1篇第3章「貨幣または商品流通」で述べられているのと同じく[3)]，同じ章で価格と価値量との不一致の可能性としてとりあげられている[4)]。とすれば，我々が生産価格論段階で総計一致命題を考察する以前に商品論段階で指摘される不一致の可能性を検討する必要性があるだろう。

資本論全体の構成を概観してみよう。商品論・貨幣論段階では，価値の実体，本質および形態の分析がなされる。そして続く資本の段階では，資本価値のにない手としての商品や貨幣の形態規定がなされる。以上が資本の生産過程としての経済学の根源的諸カテゴリーの分析である。以上を踏まえて資本価値の流通過程における諸形態規定が，資本の流通過程として分析される。資本の総生産過程と

＊昭和57年2月22日　原稿受理
1)　大阪産業大学短期大学部

して，以上の規定を踏まえて価値が如何なる変容，転形にさらされるか，そして資本価値としての剰余価値がどのようにしてどのような形で諸所得へとふりむけられてゆくかが考察されることになるのである。したがって商品論段階における価値と価格の不一致の可態性は，価値が変容を受ける資本の総生産過程における価値と価格の背離という現象の本質を示唆していることになろう。

では，商品論段階において早々とたちあらわれる価格とは何なのであろうか。また如何なる性格を持っているのであろうか。この段階における価格とは価値の貨幣形態のことである。商品価値の貨幣表現のことであり，価値どおりに売られることがあるとすれば，価値どおりに販売される価格のことである。その意味で，需給関係に影響される市場価格，諸資本の競争にさらされる生産価格と比較してみれば，完全に無菌状態にある純粋培養されたともいえる価格である。われわれはこの価格のことを価値価格[5]と呼ぶことにする。

この価値価格は，市場価格，生産価格のように，需要供給，諸資本の競争とは無関係であるがゆえに，価格としては本源的な価格であり，諸価格カテゴリーの核的存在である。したがって下向的序列の上では価格の末尾に位置することになる。と同時に，価値形態の序列の上では最高形態としての位置をしめることになる。ゆえに価値価格は価値と生産価格の結節点をなし，価値から生産価格への転形を考える際の鍵をなすであろう。

それは又，先ほど指摘した価値量との不一致の可能性を内包した価格でもあり，そのうえ，価値と価格のディメンジョンを考えるうえでも最も重要な価格カテゴリーである。したがって，本稿においては，価値価格を生産価格と価値の結節点として位置づけたうえで，それの価値性格の検討を中心におこなうこととする。

1) 本稿は，昭和56年度大阪産業大学産業研究所特別研究費をもとにした研究の一部である。
2) 置塩信雄「マルクス経済学」筑摩書房　1977年　pp.217～9参照
3) Vgl. Das Kapital, Bd.l, Dietz Verlag, 1971 (Marx Engels Werke Bd.23)
(以下，Kapltal と略記)
ss.119～152
(訳本として本稿を通じ全集版，大月書店　1968年を用いる。)
［訳］pp.138～181
4) Vgl. Ibid., s.117　［訳］pp.135～6
5) Vgl. Ibid., Bd.Ⅲ, s.184
„Es sind prima facie zwei ganz verschiedne Dinge, ob Waren zu ihren Werten verkauft werden (d.h. ob sie im Verhältnis des in ihnen enthaltnen Werts, zu ihren Wertpreisen, miteinander ausgetauscht werden) oder ob sie zu solchen Preisen verkauft werden, daß ihr Verkauf gleich große Profite auf gleiche Massen der zu ihrer respektiven Produktion vorgeschoßnen Kapitale abwirft."
(傍線　筆者)
Wertpreis つまり価値価格は資本論においてあまり用いられていないが，これは数少ない引用の１例である。価値価格は，つまるところ，商品論における価値形態の最高形態と同義であり，これを根拠にして価値の貨幣形態のことを価値価格と呼ぶことにする。

Ⅱ．商品の二面的性格

①　物と商品

物は存在するだけでは物以外の何物でもない。何らかの有用性をおびることにより人間に対峙する。しかし物が有用性をおびるだけではただ人間に対峙するだけであり，人間がその有用性をおびた物の存在に対して何らかの必要性を感じた時に，はじめてその物は単なる物から有用物となる。その時にその物は人間の使用対象となる，使用価値を持つことになる。

たとえば鉄鉱石を例にとってみよう。鉄鉱石がただ人間の目の前に存在するだけではただの石ころにすぎないだろう。しかし鉄鉱石から鉄を精錬することに気づいた時に，又，人間が鉄のさまざまな使用方法に気づいた時に，いったん鉄のもつ諸属性により人間が何らかの有用性を享受しうることに気づいた時に，それは使用対象となりその存在が認められることになる。ピッチブレンド・カルドー石も同じである。人間が使い方を知らないうちは人類の生誕以来つい最近まで，ただの地球上に存在するもの以外の何物でもなかった。少なくとも使用対象としての役割はほとんどなかったはずであるが，精製すればウランを手にすることができると気づくやいなや，ただの石ころは有用性をおびることになる。したがって『ある1つの物の有用性は，その物を使用価値にする[1)]』ことになる。Marxが『これらのいろいろな面と，したがってまた物のさまざまな使用方法とを発見することは，歴史的な行為である[2)]』というのはそういう意味での geschichtlihe Tat なのである。

さて有用物と商品はともに人間の必要性あるいは欲望[3)]をみたすという共通の属性をもっている。商品は『その諸属性によって人間の何らかの種類の欲望を満足させる物[4)]』であり，したがって有用性をもつことになり使用価値を持っている。とすれば，両者とも使用価値を持つことになる。では，有用物と商品を区分するものは一体何なのであろうか。ただ人間の身の回りにふんだんにあり，平均的条件のもとでは何の労力もなしに有用性を享受しうる物は，単なる有用物であり商品とはなりえない。たとえば空気，陽光がそうであろう。又，何の権利関係も生じていない時代の土地とか水もそうであろう。さらに，人間が労力をつかうことにより獲得した物でも，例えば木の実や獲物は，ただその人間および家族がその使用価値を消費するかぎりでは，やはりまだ有用物の範囲をこえぬことになる。結局のところ，有用物と商品を決定的に区分するものは交換という行為である。つまり，自分の労働と自然の所産としての生産物が，他人にとって獲得しえなかった使用価値を持つにいたってはじめて，単なる有用物から商品へとなりあがるのである。

したがって，人間労働の所産としての生産物が単なる物から商品へと転化する契機となるのは，人間対人間の交換行為ということになろう。しかしこの交換という行為は，はじめは自然発生的なものであるが，商品生産社会としての色彩をおびるにつれて交換の範囲が拡大されることになる。そこではもはや，生産手段の私有，自立的生産者の存在，自然発生的な社会的分業にうらうちされた商品生産が，社会の経済的基盤として確立されたことを意味するだろう。同時にまた，生産力の発達につれての人間の欲望対象の拡大，すなわち商品種類の増大は，商品生産の，社会に占める役割の上昇を意味するだろう。したがって，商品生産が支配的な社会＝資本主義社会の経済を考える際，商品の分析がとりもなおさず重要となるのである。はじめに有用物と商品の比較をおこなったが，両者はともに使用価値を持つことを確認した。さらに商品は交換という行為に直面することにより有用物から商品へと転化することがわかった。したがって，商品は使用価値とそれ以外に「交換」をうながす何かの性質をもつのである。ここにおいて，すでに商品は二面的性格をもつのであるが，「交換」をうながす何かの性質をもつものが使用価値そのものなのかどうかということ，さらにもし使用価値以外の何ものかによるのであれば，それは何なのかということを次に考えてみよう。

② 商品交換について

まず使用価値の性格を交換と切りはなして考えてみよう。まず第1に商品体そのものが使用価値であろう。商品の有用性は，例えば砂糖が甘いから甘味料としての有用性をもつが，その有用性は砂糖という素材なしには存在しえない。素材に付属するというよりも素材がそのような性質を持つがゆえに甘味料としての砂糖が存在するのであるから，素材すなわち商品体そのものが，甘さという使用価値そのものなのである。第2に量が使用価値には重要である。どれだけの有用性が人間の欲望充足に対してふりむけられるかが，使用価値の取得，消費に関して最大事となる。もちろん効用逓減が提起されようが，それも使用価値の量的規定性にからむことがらである。次に第3に，使用価値実現は使

用又は消費のみによってなされる。すなわち商品の使用価値側面は商品の消費により消滅するのである。もちろん他の側面についてはそうではない。第4に，使用価値は商品生産社会における富の素材的内容である。というのは，およそ富とは欲望の集積物であり，有用性をおびた物の集合体であるからである。したがって使用価値は富の素材的内容をなすのである。

次に，商品交換を考えてみよう。商品が単なる有用物と区別されるのは交換されるからであるということをすでに指摘しておいた。したがって商品は使用価値とならんで，一定量の他商品と交換される性質をもっているのである。この性質のことを我々は交換価値と呼んでいる。したがって商品は使用価値と交換価値という2つの性格をもつことになる。つぎに，a量の小麦＝ℓ量の鉄という交換方程式を考えてみよう。この方程式が成立するということは異種の使用価値の異なった量の等置を意味する。したがってこの方程式より読みとれることは次の2点であろう。まず第1に使用価値は交換価値のにない手であるということ。第2に交換価値は異種の使用価値の量的関係として表現されるということ。したがって第2の点からは，aとℓは変数であるから『交換価値は偶然的なもの，純粋に相対的なものであるように見え，したがって，商品に内的な，内在的な交換価値（valeur intrinsèque）というものは，1つの形容矛盾[5]［contradictio in adjecto］であるように見える[6]。』ということが言えよう。

しかし前述の交換方程式の右辺には，さまざまな量のさまざまな商品が代入しうることより，小麦は多くの交換価値をもちうることに留意しなくてはならない。同時に，右辺に様々な量の様々な商品が代入されようとも，それらは置換可能な，互いに等量の交換価値であることに注意しなくてはならないだろう。したがって，同一商品のある交換価値は1つの同一な物を言いあらわしているのである。しかし又，交換価値はそれに内在しているある物の現象形態であるにすぎないのである。後者についてさらに考えてみよう。前述の交換方程式の意味するところは，a量の小麦もℓ量の鉄も方程式の両辺に等置されるからには同じ大きさのある物に整約されうるから等置されうるということである。つまり，a量小麦＝ある共通物＝ℓ量鉄ということである。その共通物は，商品に含まれる自然的属性ではありえない。なぜならば属性がおよそ価値と名のつくものに関係するのはただ使用価値に対してだけだからである。使用価値が交換価値にからむのはただ交換関係において量的に比較対象となるときだけなのである。『使用価値としては，諸商品は，なによりもまず，いろいろに違った質であるが，交換価値としては，諸商品はただいろいろに違った量でしかありえないのであり，したがって一分子の使用価値も含んではいないのである[7]。』

以上のことを視点をかえて考えてみよう。ある個人が自分の所有している生産手段で自分の労働を自然対象に対して加えることにより付加する価値は使用価値であり，それは私的性格をもっている。私的生産者は何ら社会性を考えずひたすら己れの生産物に使用価値を付加するだけである。したがって商品生産社会が単に自家消費する個人の総和で示されるだけであれば，「自分のための使用価値」を各個人が生産するだけであり，何ら社会性をおびた商品生産がなされるわけではない。各商品が「他人のための使用価値」としての性格をおび，したがって社会的性格をおびるのは交換がなされるようになってからである。いったん商品交換がなされるようになれば，各人の商品には意識せずとも社会的生産による生産物としての押印がなされるのであり，私的労働に対しても社会的総労働の一分子としての性格がいやおうなく付加されることになるのである。『社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態において，かような一定の割合での労働の分割が貫徹される形態，それがまさにかような生産物の交換価値[8]』なのである。では，交換方程式の両辺に等置される2商品の整約される同じ大きさのある物とは，共通物とは何なのかを，次に明らかにせねばなるまい。

③　商品の二面的性格

商品交換をへることにより商品体の使用価値側面が捨象されるとなれば，商品体に残されたものは労働生産物だけである。というのは商品体の構成要因は自然的属性＝使用価値，と労働生産物という属性だけだからである。しかも，労働生産物の使用価値を捨象するとなれば，それを使用価値にしているところの物体的な諸成分や諸形態をも捨象することになる。すなわち，労働の具体的形態が消しさられるのである。米作，紡績，販売といったような労働の個別的特質が捨てさられ，ただ人間労働一般，すなわち抽象的人間的労働という側面だけが残るのである。したがって人間労働一般の『凝固物』だけが，労働生産物に残された唯一の特質である。労働生産物には『人間労働力が支出されており，人間労働が積みあげられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として，これらのものは価値――商品価値なのである[9]。』

つまり，交換関係に介在したある共通物とは価値のことであり，交換価値はその意味で，価値の現象形態であるといえよう。また価値は様々な価値形態をとるが，最も単純な，それでいてすべての価値形態を貫ぬく根源的な諸性格をもった，価値の最初の価値形態であり，後ほど指摘するように，交換価値こそがひいては価格の最初の現象形態なのである。

以上で価値の質的規定が大まかになされたであろうが，では量的規定はどのようにしてなされるのであろうか。それは，価値を形成する労働量，すなわち価値に体化した労働時間によりはかられるのである。しかも，私的生産者としての労働時間ではなく，社会的平均的な労働時間によってである。というのは，先に指摘したように私的な生産物の私的消費という段階をとおりこして商品交換のおこなわれる段階においては，商品生産はすべて社会的性格をおびることになるからである。さらに『商品世界の諸価値となって現われる社会の総労働力は，無数の個別的労働力から成っているのであるが，ここでは１つの同じ人間労働力とみなされる……[10]。』からである。したがって，価値量を規定するものは社会的必要労働時間であり，交換される二商品には，等量の社会的必要労働時間が体化されていることになろう。

商品は何度も指摘してきたように本来的には私的生産の産物であり，それに社会的性格が付加されるのは交換をとおしてである。ここにいたって，商品には使用価値と価値という二面的性格があり，価値には社会的性格が商品交換により押印され，使用価値は本来的に私的なものであることが確認されることになろう。この二重性を次にさらに立ちいって考えてみよう。

④　労働の私的性格と社会的性格

次に観点をかえて価値を形成する労働を考えてみよう。使用価値を生産する労働は使用価値の様々に異なるという個別的特性のために，『その目的，作業様式，対象，手段，結果によって規定[11]』される。このように使用価値を生産するような労働を有用労働と呼ぶが，それは互いに質的に異なり具体性をおびた労働である。みられるように使用価値を生産する私的労働は，具体的有用労働は，質的に異なり，独立的であるがゆえに社会的分業を誘発する原動力となるのである。さて，このような労働の具体的有用的性格を無視すれば，ただ人間の肉体的および精神的側面だけが労働に残されることになろう。ただ共通して，働く，労働の生産的支出，という性格だけがのこるのである。それはちょうど商品から使用価値を除去すれば価値一般だけが諸商品の共通物として残ったのと同じであり，各労働の有用的形態の相違を考慮外におけば，人間労働一般という抽象的人間的労働としての性格だけが労働に残されるのである。したがって，複雑労働と単純労働という区別も，熟練労働と不熟練労働の区別も，一生懸命に働くのかなまけるのかという区別もなく，社会的平均的労働時間でもって示される，均一化された，ただ労働一般という性格だけがのこるのである。

このように価値が均一化した社会的性格をもつのと同じく，価値の実体を形成する抽象的人間的労働も均一な無差別な社会的性格をおびるのである。したがって商品価値の二側面，使用価値と価値が，

私的性格と社会的性格を兼ねそなえているのに対応するように，それらの諸価値を形成する労働，すなわち具体的有用的労働と抽象的人間的労働も，私的性格と社会的性格をそなえているのである。

労働の私的性格と使用価値の私的性格は，先に何度も指摘しておいたように，商品交換を契機として社会的性格をおびるのである。つまり，本来的に商品には私的性格と社会的性格という対立的要因が内在しているわけであるが，その対立的要因は逆の表現をすれば，商品交換を通じて隠蔽されることになるだろう。社会的性格をともにおびるという名のもとにおいて。

以上の分析をつうじてたえず用いた「交換」はあくまでも可能性をおびたという意味での交換である。次に交換の実現過程としての可能性をおびた価値形態の展開をみてみることにする。そこでは，商品の二面的性格がどのようになるのか，労働の二重性がどのようになるのか，私的性格と社会的性格がどのように展開されるのかをもあわせて，価値形態の展開過程を考察してみることとする。

1) Kapital, Bd.I, s.50, ［訳］p.48
2) Ibid.,
3) Dietz 版においては Bedürfnis となっている。向坂訳，長谷部訳，全集刊行委員会訳すべてにおいて「欲望」と訳されている。Bedürfnis は「必要なもの」，「必要と感ずることあるいはもの」と訳するのが適当かもしれないが以上のことを念頭においたうえであえて通常用いられているように「欲望」で統一しておくことにする。なおラシャトル版の邦訳においては「必要」と訳されている。［「フランス語版資本論」江夏・上杉共訳　法政大学出版局 1979年］。訳者の指摘どおりに，Bedürfnis＝besoin は『「欠乏した物を必要とすること」または「必要とする物」』（同書 p.395）という意味であり，「必要」と訳すのが妥当であるかもしれない。しかし「欲望」という訳が一般的であり混乱をさけるために，あえて従来通りの訳にしたがった。
4) Kapital, Bd.I, s.49, ［訳］p.47
5) Contradiction in terms, すなわち「言いまわしの上での矛盾」とでも訳すべきであろう。向坂訳では「背理」と訳され，長谷部訳では全集版と同じく「形容矛盾」と訳されている。当該箇所を平易に訳すれば次のようになるだろう。「交換価値は，まず交換比率として現象するものであることから，交換価値が商品に内在するということは，一見するとつじつまがあわないかのようにみえるが，そうではない。」
6) Kapital, Bd.I, ss.50～1, ［訳］p.49
7) Ibid., s.52, ［訳］p.51
8) マルクス・エンゲルス「資本論に関する手紙」所収「113 マルクスからクーゲルマンへ。1868年7月11日」p.223, 岡崎次郎訳，法政大学出版局，1967年
9) Kapital, Bd.I, s.52, ［訳］p.52
10) Ibid., s.53, ［訳］p.53
11) Ibid., s.56, ［訳］p.57

Ⅲ. 価値形態の展開

商品価値は抽象的人間的労働を対象化したものであり，価値形態としての交換価値の姿をとることにより現象する。商品はこれから分析しようとする諸価値形態をとることにより交換の実現がなされ，商品の二面的性格が展開されることになる。そのことは又，同時に現象のうらにひそむ価値の実体をなす抽象的人間的労働を浮きぼりすることになるだろう。

商品が商品として現象するのは，使用価値または商品体の形態をとり，使用対象であると同時に価値のにない手であるからにほかならない。したがって商品が商品形態をとるのは現物形態と価値形態をもつからである。ところが，現物形態とはことなり商品の対象性には自然的属性は何ら関与せず，その実存性を示すものは，商品対商品という関係にほかならない。したがって価値対象性を明らかにするために，ふたたび交換関係にたちもどらなくてはならない。交換価値こそが最初の，かつ最も本

源的な価値形態であるからである。

① 単純な価値形態

［x量の商品A＝y量の商品B］

Marx はこの交換方程式の読み方を，『x量の商品A＝y量の商品B　または x量の商品Aは y量の商品Bに値する[1]。』と解釈する。商品Aと商品Bはこの方程式では明らかに違った役割をはたしている。すなわちAは自らの価値をBで表わしており，Aは能動的な役割を，Bは受動的な役割をはたしているのである。またAは Bという他商品の姿をかりて自分の価値を表わしているのである。すなわち，「商品Bは商品Aの価値の鏡である。商品Aは価値を映すという積極的役割を果たし，商品Bは，商品Aの価値を測定するという受動的，消極的な役割を果たす[2]。』ということになろう。したがって商品Aの価値を相対的価値と呼び，商品Aは相対的価値形態にあるということになり，他方，商品Bは等価物として機能するがゆえに等価形態にあるということになる。

商品Aの場合は相対的に商品Bが等価物であるということを前提にして，自分の価値表現をおこなうことができる。しかし商品Bの場合は，等価物としての役割をはたしているこの交換方程式にあっては，同時に相対的価値とはなりえず，したがって自分の価値表現をおこないえないのである。よって商品Bが自分の価値表現をおこなうには，交換方程式の右辺と左辺を入れかえることにより相対的価値形態にたち同時に商品Aを等価物とする以外に方法はないことになる。『商品が相対的価値形態にあるか，反対の等価形態にあるかは，…… その商品が，自分の価値を表現される商品であるのか，それともそれで価値が表現される商品であるのかということだけによって，定まるのである[3]。』

さて，目下の課題は商品の価値表現が異った商品の対比のうちにいかに示されるかということである。比較というからには共通のものさしが用意されねばならない。そのものさしとは，使用価値を生産する具体的有用労働ではありえない。なぜならば具体的有用労働とはその労働の特質でその労働の特殊性をいいあらわすものにほかならないからである。では共通の単位とは一体何なのであろうか。Marx の用例に従ってみよう。

20エレのリンネル＝1着の上着

この等式では価値量の面からみると両辺の商品は同じ単位で表現されている。しかし質的にみるとさきほどのべたようにリンネルは上着で自らの価値表現をおこなっているのみである。上着は，等価物としてのみ存在しうるだけである。では何故，このような回り道をへなければ，共通物を見い出しえないのだろうか。1商品の価値は人間労働の体化したものというだけでは不十分なのだろうか。たしかに人間労働一般の体化したものという表現は価値の本質を表わしてはいるが，価値形態を説明することはできない。構成要因が同じでも現象形態のことなるものがある（Marx の豬酸と蟻酸の用例のように）ということに注意をはらわねばなるまい。商品から価値を抽出する方法は，それ自体，まず使用価値を捨象しそれから交換価値が価値の現象形態であることを述べるというように，あくまでも論理的かつ説得的ではあるが，異質労働の同質性をいうには，異質労働を等置することによらねばならない。このような回り道をへなければならない。久留間鮫造氏[4]の言われるように，他商品を等価形態においてはじめて自らの価値表現がなされることを「回り道」は意味しているのではない。単に私的労働の生産物が，何ら社会性をおびずに独立して存在しているだけでは，価値形成的労働としての抽象的人間的労働の存在を明確にはしえないのであり，商品と商品を対比する「回り道」をへて，その作業ができるのであり，社会的性格をおびた労働の存在を証明することができるのである。何分にも価値は，もちろん使用価値もそうであるが可視的ではない。もちろん使用価値の場合，我々は五感でもって感じとることはできるし，容易にその存在を確認しうる。しかし価値はそうではなく，現象させることにより，形態をとることによってのみ，その存在を確認しうるわけである。だから Marx は次のように言う。『織布との等置は，裁縫を，事実上，両方の労働のうちの現実に等しいものに，人

間労働という両方に共通な性格に，還元するのである。このような回り道をして，次には，織布もまた，それが価値を織るかぎりでは，それを裁縫から区別する特徴をもってはいないということ，つまり抽象的人間労働であるということが，言われているのである。ただ異種の諸商品の等価表現だけが価値形成労働の独自な性格を顕わにするのである。というのは，この等価表現は，異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の諸労働を，実際に，それらに共通なものに，人間労働一般に，還元するのだからである[5]。』

したがって，Marx の用例にしたがえば，リンネルを織布する労働は，その労働とは質的に異なる，上着を裁縫するという労働に，等置することにより，共通の，違った商品に対象化はされているが，社会性をおびた抽象的人間的労働であるということになる。

では上着のほうはどうなのであろうか。リンネルの価値表現は，上着という鏡をとおしておこなわれる。すなわち，価値関係の中での上着の示す役割は，20エレのリンネルと交換可能な，20エレのリンネル所有者からすれば，交換してもよいと思うだけの，使用価値を1着の上着がもっているということを示すということである。とすれば，具現化された価値体として上着はふるまっているのであり，現物形態として交換関係の中でリンネルの価値形態に相対していることになる。等価物は使用価値が，価値を表わすものとしての価値体となっているのであり，その使用価値がリンネル価値の現象形態となっているのである。とすれば，具現化された価値体として上着はふるまい，現物形態として交換関係においてリンネルの価値形態に相対することになるだろう。労働という面からみてもそうである。上着を裁縫するという具体的有用労働は，リンネルに対象化された抽象的人間的労働の実現形態となるのである。『等価物として役だつ商品の身体は，つねに抽象的人間労働の具体化として認められ，しかもつねに一定の有用な具体的労働の生産物である。つまり，この具体的な労働が抽象的人間労働の表現になるのである[6]。』しかしその具体的有用労働が，抽象的人間的労働の実現形態となるということは，そのことによって他の労働との『同等性の形態を持つ[7]』ことを意味する。したがってそのような回り道をへることにより，等価物を形成する私的労働にも社会性が付与されることになるのである。その社会性を，等価物はうまれながらにその他の属性と同じように持ちあわせているようにみえるがそうではない。それはあくまでも交換関係の中で，等価形態の位置を占めることにより付与されるのである。したがって，一般的等価としての性格をもつ貨幣には，うまれながらにして，等価物としての性格をもっているように思いがちであるがそうではないことに注意する必要があるだろう。

したがって交換関係のなかで相対的価値形態に立つ商品は，その現物形態を使用価値として，一方，等価形態にたつ商品の現物形態はただ価値形態として，すなわち価値としてあらわれるということになろう。このことは，商品に内在する使用価値と価値の二面性が，商品関係においては，その二面性がそれぞれの商品の表に，外的対立としてあぶりだされることを意味する。その意味で，単純に独立に商品を解剖するだけでは，二面的性格を把握するのに困難がつきまとうが，商品性格は商品関係のなかでは明らかになるのである。同時に，商品関係の中においてはじめて，等価形態をとる商品により，商品価値の社会的性格が示されることになり，ここに商品に内在する二面的性格の外化に対応するように，私的性格と社会的性格も外化してくることが明らかになるのである。労働の側からみても同じことである。

さて，すでに指摘したように，価値を表わす商品も，それを映しだす商品も抽象的人間的労働の所産である。したがって「単純な，個別的な，または偶然的な価値形態」は，ただある特定の商品が他商品との関連において，質的な同等性と割合を表わすにすぎないことより，人間労働一般の所産としての価値性格を表わすには，まだ不十分であろう。しかし，次の段階への移行は容易になされるであろう。なぜならば，表題の示すとおりにこの価値形態は「偶然的」であり，交換方程式の右辺にはいる商品種類を特定しているわけではなく，「価値の鏡」はどれにとってかわってもよいからである。

ただ，その「価値の鏡」は，『ただ商品Aとは違った商品種類の数によって制限されているだけである。それゆえ，商品Aの個別的な価値表現は，商品Aのいろいろな単純な価値表現のいくらでも引き伸ばせる列に転化する[8]。』ことができるのである。

② 全体的な，または展開された価値形態

［z量の商品A＝u量の商品B　または＝v量の商品C　または＝w量の商品D　または＝x量の商品E　または＝etc.］

ある商品，この場合はA，の価値は他の無数の商品で価値表現されるのであり，単純な価値形態の価値の鏡が1つであったのに対して価値の鏡が無数に存在することになる。この価値形態をとるに至って，Aを形成する労働は真の意味で社会的平均的かつ，無差別な抽象的人間的労働であることが，示されるのである。というのは，この形態で商品世界に存在するA以外の全商品が等価物となりうるからであり，AはA以外のどの商品で表現されようとも，同じ質であり，同じ価値量であるからである。したがってまた偶然的に二商品間に限って交換が成立したのではないかということも否定され，交換を規定するものが，先にのべたものであるということがより明確化されることになるのであり，同時に『交換が商品の価値量を規制するのではなく，逆に商品の価値量が商品の交換割合を規制するのだ，ということが明らかになる[9]。』のである。

しかし，商品Aは価値の基本概念として，人間労働一般を体化しているのであるが，全商品がそうであるというのではない。等価形態にたつ商品がその性格をもつには，いちいち方程式の左辺にたって，右辺にその他の商品を置くという面倒をふまなくてはならない。さらに，1つの等価形態にたつ商品は他の等価形態にたつ商品と相互に反発しあうことになろう。『各個の商品種類の現物形態が，無数の他の特殊的等価形態と並んで一つの特殊的等価形態なのだから，およそただそれぞれが互いに排除しあう制限された等価形態があるだけである[10]。』

このように等価形態が互いに排除しあい制限された形態にとどまるのは相対的価値表現が未完成であり，そのことを等価形態が反映しているからである。というのは，相対的価値形態の鏡が全商品種類をカバーしうるとはいっても，表示の列は完結しえず，そういう意味でまず第1に未完成であるからである。第2に，価値の鏡は個別的であり一般的等価とはなりえず，いわば寄木細工にすぎないからである。したがって，総和としては普通性を両形態とももちうるが，統一としては示されえないからである。

しかしながら未完成であるにせよ，この価値形態はさきにふれたように一応の普遍性をもっていることにはかわりはなく，その未完成としての性格は，さらなる次の形態への移行の可能性を内包していることになる。たとえば，この形態をバラバラにして表現しなおせば次のようになる。

$$②' \begin{cases} z\text{量の商品A}=u\text{量の商品B} \\ z\text{量の商品A}=v\text{量の商品C} \\ z\text{量の商品A}=w\text{量の商品D} \\ z\text{量の商品A}=x\text{量の商品E} \\ z\text{量の商品A}=\text{etc,} \end{cases}$$

相対的価値と等価物をいれかえてみることは可能である。すなわち，商品B，C，D，E，etc.，の所有者は必ず商品Aと交換しなくてはならないと想定してみるのである。

$$②'' \begin{cases} u\text{量の商品B}=z\text{量の商品A} \\ v\text{量の商品C}=z\text{量の商品A} \\ w\text{量の商品D}=z\text{量の商品A} \\ x\text{量の商品E}=z\text{量の商品A} \\ \text{etc.}\qquad\qquad=z\text{量の商品A} \end{cases}$$

③　一般的価値形態

②″を書きなおせば次のようになろう。

$$\left.\begin{array}{l} \text{u 量の商品B} = \\ \text{v 量の商品C} = \\ \text{w 量の商品D} = \\ \text{x 量の商品E} = \\ \text{etc.} \qquad = \end{array}\right\} \text{z 量の商品A}$$

この表現においては，相対的価値形態に位置する無限の商品は，１つの商品Aで，価値表現することが可能である。したがって，価値の鏡となる１つの商品をのぞいたすべての商品の価値は統一的に示され，社会的に認知されるのである。したがって，あとから新たに派生してくる商品もこの表現に加わらざるをえないであろう。さらにそれだけではなく，相対的価値としてふるまう商品間の比較も可能となるのである。したがって，商品Aのみが価値の現象形態としてふるまい，商品A以外のすべての商品は使用価値の現象形態となるのである。その意味で商品が一般にもつ価値と使用価値の二面的性格をより容易に把握しうることになろう。というのは，『価値形態一般が発展するのと同じ程度で，その二つの極の対立，相対的価値形態と等価形態との対立もまた発展する[11]。』からである。

この形態において，'はじめて商品Aに一般的等価形態の名が与えられる。同時にAを除いたすべての商品に対して一般的な社会的な相対的価値形態の名が与えられることになる。Aが一般的相対的価値形態に参加しようとするには２つの方法があろう。まず第１に極の移転により相対的価値形態にたち，一般的相対的価値形態の名称をすでに得た，自分を除いたすべての商品を，等価形態の位置へとおしやる方法。少々面倒ではあるが可能な方法であることにはかわりはない。しかし次の方法のほうがずっと容易であり，又完全な方法である。一般的等価形態の位置に商品Aがたつのは，何も好き好んでのことではない。商品世界のなせるわざであり，A以外のすべての商品からはじきだされたかたちで，一般的等価物の押印がなされただけである。商品世界が，一般的等価形態を，現物形態に価値形態を合成するある特定の商品に対してあらためて押しなおした段階で，社会的に慣習的に歴史的に認められた商品に対して，おしなおさなければならない。それが第２の方法である。Marx の用例ではAをリンネルとしているが，歴史的にみても，社会的にも，慣習的にも，リンネルは他商品全部から，一般的等価にふさわしいとは認められなかった。では，商品の持つ自然的属性に加えて一般的等価としてもっともふさわしい商品とは何であろうか。そたは貨幣商品金である。

④　貨幣形態

$$\left.\begin{array}{l} \text{u 量の商品B} = \\ \text{v 量の商品C} = \\ \text{w 量の商品D} = \\ \text{x 量の商品E} = \\ \text{etc.} \qquad = \\ \text{z 量の商品A} = \end{array}\right\} \text{a 量の商品金}$$

一般的価値形態から貨幣形態への移行に際しては，何ら本質的な差違はない。別に一般的等価物は金にかぎらず，歴史的にいっても，その位置を金以外の商品が，例えば貝殻とか，黒曜石とか，絹とか，他の金属が，位置を占めていた。しかし，金の持つ属性[12]が，一般的等価物としての機能をもっともよくはたすと社会的に認められるから，一般的等価形態として機能するにいたったのである。ただし注意しておかなくてはならないことは，「貨幣としての金」ではなく，あくまでも「貨幣商品金」なのであり，一般的な商品と何らかわらぬ機能も残しているのである。

貨幣商品金が一般的等価形態となれば，商品の相対的価値表現は価格形態となり，ここに価値価格がうまれることになる。すなわち Marx の用例にしたがえば，

20エレのリンネル＝2オンスの金

もし2オンスの金が2スターリング・ポンドであるならば，次のようになるだろう。

20エレのリンネル＝2ポンド

これはまさに価格表示であり，ここにはじめて価格カテゴリーが登場することになる。ただし注意しなくてはならないことは，今の論理段階ではあくまでも，交換の可能性の上にたって議論をすすめているわけであり，現実の交換を表現しているわけではない。したがって，価値表現が価格表示しうる可能性を獲得したということになるだろう。実際に商品交換が金を相手になされてはじめて，価値物に価格表示がなされるのである。

1) Kapital, Bd.I, s.63, ［訳］p.65
2) 宮本義男「資本論の論理体系」第2章　p.53参照，有斐閣，1969年
3) Kapital, Bd.I, s.64, ［訳］pp.66～7
4) 久留間鮫造「価値形態論と交換過程論」 pp.49～77参照，岩波書店，昭和32年
5) Kapital, Bd.I, s.65, ［訳］pp.68～9
6) Ibid.,　s.72, ［訳］p.78
7) Ibid.,　s.73, ［訳］p.79
8) Ibid.,　s.76, ［訳］p.84
9) Ibid.,　s.78, ［訳］p.86
10) Ibid.,　s.78, ［訳］p.87
11) Ibid.,　s.82, ［訳］p.91
12) 均質であること，任意に分割可能であること，使用価値としての耐久性が大であることが，一般的等価物として金が歴史的に，社会的に認知されるにいたった，金の持つ属性である。

Ⅳ. 結

本稿における主題は，生産価格と価値の結節点としての性格を持つと規定された価値価格の検討であった。そのために，価値の本質を質的側面と量的側面より考察し，さらに価値が価値形態を必然的にとらざるをえないことをふまえたうえで，価値形態の展開過程をフォローしたわけである。その結果，価値は必然的帰結として価値の最高形態としての貨幣形態へいたることが，すなわち価格形態として現象することが示されたわけである。したがって価値は必然的に価値価格へと転化せざるをえないわけであり，価値価格には価値性格が色濃くのこり，その本質には価値と何らかわるところのないものが核として存在するものの，形態規定という外皮を，殻を，かぶっている，ということが示されたわけである。では，価値が価格呼称を必然的結果としてもつということは，どういう意味なのかということがここにおいて問題となるだろう。そのことを視点をかえて，今までの考察の総括をおこなうことによりあきらかにしてみることにする。そのことは価値と価格の同義性と同時に差違を明らかにし，さらに価値価格の結節点上における意義を示すことになろう。

生産物が単に生産物として存在するだけでは，商品には何の疑問の余地もなく神秘性が存在するわけでもない。すなわち，労働が人間の肉体的能力の支出であり，精神的能力の支出であることは自明のことであり，同時に，労働量の多少が価値量の多少に連動することは当然のことであるからである。つまり，労働の質の面からみても量の面からみても，ただありのままに労働が生産物にはいりこんだだけということである。しかし，何の規定もうけなかった生産物が商品形態という規定をうけると，ことは違ってくる。すなわち，抽象的人間労働には労働生産物の価値対象性が付加され，労働時間には価値量という形態が付加され，さらに，労働の私的性格には労働生産物の社会的性格が付加される

のである。したがって，『商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ，これらの物の社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させる[1]。』ということになるのである。しかし，商品形態にしろ労働生産物にしろ，労働生産物の諸属性とは何の関係もないのであり，物と物との関係は社会的関係以外の何物でもないのである。したがって，労働生産物が商品となる，交換関係という社会的関係のもとにおかれるやいなや，生産物のもつ私的性格は社会的性格をおびることになるのである。そのことは同時に，労働のもつ私的性格が交換という社会関係の中におかれるやいなや，社会的総労働の一部としての社会的性格をおびることをも意味する。すなわち，その性格の付与はあくまでも商品体をかりておこなわれるがゆえに，本来的な労働の集合としての社会的総労働の一部としての，私的労働対私的労働の関係としてではなく，物と物との関係として社会的関係の中に現われるのである。このような商品の謎的性格は労働生産物が商品となる社会，すなわち商品生産社会における特質であり，商品の本来的な姿ではありえない。しかし，その謎的性格は，商品と商品の関係，とりわけ価値形態の最高形態＝貨幣形態において，より増幅されることになり，価格表現のうちに，物と物の関係があたりまえであるかのようにふるまうことになるのである。

そのことをさらにたちいって考えてみよう。商品交換は商品所有者が互いに相手を私的所有者として認めあうところから出発する。商品所有者にとっては自己の商品は交換価値の担い手としての使用価値をもつだけである。さらに商品所有者は，商品を価値として比較対照したうえで交換し，価値実現をはからなければならない。したがって使用価値実現のまえに価値表現がなされなければならない。と同時に，有用性をおびた具体的労働の支出が他人にとって取得する値うちがあるかどうかで交換が決定づけられるわけであるから，価値実現のまえに使用価値実現がなされねばならない。したがって，商品交換にはまずこのような矛盾がつきまとうのである。また一方では，使用価値実現という観点からすれば，交換は個人的な過程であり，また同時に価値の観点からすれば，交換は社会的過程であるということになる。いいかえると，交換の対象とする商品は商品所有者にとっては特殊的等価であり，自己の商品はどの商品に対しても一般的等価物であってほしいと商品所有者は願うのである。しかし，ただそのように願うだけでは，商品は生産物として存在するだけである。商品交換が実現されるには，ある特定の商品を社会の商品群からはじき出して，社会的に認知された一般的等価物とする必要があり，ここにおいて，必然の産物としての貨幣が創り出されるわけである。

その貨幣の登場は，いまいった交換過程における矛盾を解消することになるだろう。というのは，貨幣商品は交換価値＝価値と使用価値という二面性それぞれに対応するように，一般的等価物，一般的交換手段，という対立的な特殊的性格をかねそなえているからである。すなわち，貨幣商品との交換により使用価値を手放すことは価値実現をおこなうことであり，同時に，価値実現をはかることは一般的交換手段としての使用価値を取得することになるからであり，さきにあげた矛盾の１つが解消されることになる。そのことは同時に，商品交換のもつ，商品に内包された個人的過程と社会的過程との対立の解消をも意味するであろう。

このように，生産物が商品に転化する交換過程における矛盾は，交換過程の必然的帰結としての貨幣商品の登場により解消されるわけである。しかし，交換の拡大と深化は商品の本質のもつ使用価値と価値の内的対立の深化を意味すると同時に，商品と貨幣への対立の外化を意味することにもなるだろう。したがって，ますます現象形態がさも本質的性格であるかのようにふるまうことになるだろう。

今回の我々の考察は商品論段階にとどまる。しかし，すでに商品より貨幣の創出される必然性が示され，貨幣のくわしい規定までたちいっていないにもかかわらず，すでに貨幣のもつ物神的性格が指摘された。これよりさらに，ある時は商品，またある時は貨幣の姿を交互にとりつつ自己増殖をおこなう価値体としての資本にいたって，商品の持つ二面性の矛盾が深化すると同時に，それをすりかえ

て外化することによる表面上の矛盾の解消がくりかえされることになるだろう。また，資本主義的生産様式の分析に必要な新しいカテゴリーがどんどん登場するにつれて，以上のことがより複雑におこなわれるだろう。

資本の総生産過程においては，現実の，ありとあらゆる条件にさらされた具体的な商品の，貨幣の，資本の姿の分析がなされる。それに対し，資本の生産過程としての諸カテゴリーはあくまでも抽象的分析に終始する。しかし抽象的であるがゆえに，本性に近い姿が示されるのであり，あくまでも，現実に現象する可能性をもった諸形態の分析がなされるのである。したがって，ここに登場する価値価格も，価格としては，交換の可能性を持った本源的形態の価格にすぎず，そういう意味では，価格としての本質はすべてとりそろえているものの，現実の価格とはほど遠い存在である。しかしながら，「価値と価格の背離の可能性」の本質はこの段階においてはやくも示される。『商品の価値量は，社会的労働時間にたいする或る必然的な，その商品の形成過程に内在する関係を表わしているのである。価値量が価格に転化されるとともに，この必然的な関係は，一商品とその外にある貨幣商品との交換割合として現われる。しかし，この割合では，商品の価値量が表現されうるとともに，また，与えられた事情のもとでその商品が手放される場合の価値量以上または以下も表現されうる。だから，価格と価値量との量的な不一致の可能性，または価値量からの価格の偏差の可能性は，価格形態そのもののうちにあるのである[2]。』

したがって，価値価格において価値との背離の可能性が存在するわけであり，生産価格論段階における背離は当然予測しうることになるだろう。われわれの主題は，価値価格の性格規定にあったわけであり，これ以上たちいることは次の機会の課題として残しておくことにするが，先取りしてそのことにふれておくことにする。

さて，価値と価格のタームの差違についてふれねばなるまい。当然，価格は円とかポンドとかドルという通貨表示をうけ，一方価値は投入労働時間ではかられるわけである。そういう意味では，両者の比較はもともと困難であり，比較はできぬといえるかもしれない。しかし，価値形態の展開においてのべたように，通貨表示は貨幣商品金による表示と対応しており，また貨幣による表示とは一般商品の等価物表示にほかならない。したがって，価格は価値の形態規定の変容にすぎぬゆえ，価格を価値タームに変換することも，又逆に，価値を価格タームに変換することも可能であり，そのことから価値と価格のタームの差違は問題にならぬであろう。

このことをさらにたちいって考えてみよう。松石勝彦氏は，価値形態論以降の段階では，価値という表現には，「抽象的人間労働の凝固としての価値のみを意味しているばかりでなく，それの一定量の金による表現つまり価値価格[3]」も含まれていることを指摘されたうえで，「価値価格というのが面倒だから，単に省略的に価値といっているだけ[4]」であり，価値というときには価値価格と理解すべきであるといわれる。

ではもう一度我々の考察をふりかえってみよう。商品が価格形態をもつということは，商品価値の外的表現であった。潜在的には社会性をおびた私的生産物の内実の外化であった。その意味で，外化の過程をおってゆくことは，具体化，現実化の過程であり，より現実的なカテゴリーの創出過程である。つまり，貨幣，価格，資本等の創出過程であり，それは価値の外在化の過程である。したがって，より現実に直面した資本の総生産過程で登場する諸カテゴリーは，まさに，価値にいくつもの形態を付与し，転化をおしつけ，変容させた，現実的カテゴリーである。そしてその転化，変容，形態の付与は，価値そのものにそれらのことを必然化させる要因として内在化しているのであり必然的帰結としておこるのである。又，総生産過程は，それらの現実的具体的カテゴリーによりくみたてた具体的な資本の運動形態を示す場である。したがって，価値の外化物として価値価格をとらえる限りでは，価値形態論以降，価値という表現がなされる時に，価値を価値価格としてとらえようと，価値形態論

終了段階では価値価格は価値の最高の現象形態であるがゆえに，そのことは一向にさしつかえがなく，松石氏の指摘されるとおりであろう。したがって，生産価格と価値の不一致をうんぬんする際には，価値＝価値価格と考えて何のさしさわりもないし，価値の外化としての生産価格を考える際には，外化物どおしの価値価格と生産価格を比較するのが当然であろう。何故ならば，生産価格論に登場するカテゴリーは，不変資本であり，可変資本であり，剰余価値[5]であり，費用価格であり利潤であるからである。価値の現象形態としてのカテゴリーを考える際，とくに，一度現象して社会的認知をうけたカテゴリーであれば，いちいち価値までたちもどる必要はない。その上にさらなる外化の殻をかぶるがよい。カテゴリーどおしの比較をする際は，外化の殻を幾枚かぶったのか，かぶった外化の殻の質の差はいかなるものなのか考えればよい。したがって価値価格と生産価格はともに価格表示がされているわけであり，価値価格という価値の現象形態のうえに幾枚の，どのような殻がかぶせられ，どのような変容をうけたのかを考察すればよいことになる。したがって，カテゴリーの差違を問題にする必要性は当然のこととしてないのではないだろうか。しかし，「価値と価値法則は，いわば知覚しえない天体の内的運動法則であり，価格と価格体系はその外観運動に相応している[6]」ことを考えると，内的法則をとらえるにはあくまでも基準が価値であることにたちもどって考えねばならないことはいうまでもないだろう。

いずれのカテゴリーも，その核は価値であり，内的法則であり，変容を重ねるにつれて，具体性をおびるにつれて，価値法則を隠蔽はするものの，内的法則として価値法則が貫徹していることに注意しなくてはならないだろう。つねに意識の上では商品価値へとたちもどらねばならないのである。そのことに留意するのであれば，価値法則とつねに結びつけて論理展開をはかるのであれば，外化物の運動形態に，外化物の比較に，外化物の生成過程に，われわれの注意をそそぐことは何の問題にもならないであろう。資本主義的生産様式の分析を主眼とする限り，現象形態の追跡が重要となるからである。

1) Kapital, Bd.I, s. 86 〔訳〕pp. 97～8
2) Ibid., s.117 〔訳〕pp.I35～6
3) 松石勝彦「独占資本主義の価格理論」 p.46, 新評論, 1972年
4) 前掲書, p.47
5) 剰余価値は，資本の自己増殖分で示されるカテゴリーである。
6) 宮本義男「資本論の再生産論体系」 p.50, 有斐閣，昭和52年